

# 保育者養成における身体表現の授業の在り方について

——「身体表現を好きになること」と「授業内容」の関係——

矢野下 美智子\*

## Desirability of a Physical Expression Class for Training Nursery Teachers

—— Correlations between Liking Physical Expression and Class Content ——

Michiko YANOSHITA

**Key words** : 身体表現 physical expression, 感性 sensitivity, 表現力 expressiveness, 授業内容 class contents

### 問題と目的

保育者養成における身体表現の授業において、学習者にどのような身体表現能力を身に付けさせなければならないのであろうか。現行の幼稚園教育要領の領域「表現」の目的には、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と書かれている<sup>1)</sup>。子どもたちに豊かな感性や表現する力を育むためには、保育者自身が豊かな感性を持ち表現する力を備えている必要があるのは言うまでもない。保育者養成校においてどのような授業内容を教えれば学習者がその力を付けることができるのであろうか。

これまで保育における身体表現はどのように捉えられてきたのかをまとめてみる。まず1948(昭和23)年に新しい幼児教育の指針となる「保育要領」が文部省から刊行された<sup>2)</sup>。保育内容として挙げられていたのは「見学、リズム、休息、自由遊び、音楽、お話、絵画、制作、自然観察、ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居、健康保育、年間行事」の12項目であった。西・本山・吉川<sup>3)</sup>によると身体表現とかかわる「リズム」では、幼児一人ひとりおよび共同の音楽的な感情やリズム感を満足させ、子どもの考えていることを体の運動に表させ、生き生きと楽しませることが目的とされていた。

1956(昭和31)年に文部省は「幼稚園教育要領」を刊行した。その際、保育内容は「健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画制作」の6領域に分類された。幼稚園教育の目標の一つに、表現に関わるものとして「音楽、遊戯、絵画その他の方法により、創作的表現に対する興

味を養うこと」とあり、身体表現と関わる「音楽リズム」では「望ましい体験」として「歌を歌う、歌曲を聞く、楽器をひく、動きのリズムで表現する」などがあげられていた<sup>4)</sup>。

1964(昭和39)年、幼稚園教育要領は改訂されたが、領域に変化はなかった。しかし初めて領域別に「ねらい」が示された。身体表現と関わる「音楽リズム」のねらいは、のびのびと歌ったり、楽器をひいたりして表現の喜びを味わう、のびのびと動きのリズムを楽しみ、表現の喜びを味わう、音楽に親しみ、聞くことに興味をもつ、感じたこと、考えたことなどを音や動きに表現しようとする、であった<sup>5)</sup>。

1989(平成元)年の幼稚園教育要領の改訂において、保育内容が現在の5領域に改められ、領域ごとに「ねらい」と「内容」が示された。領域として「表現」という名称が用いられるようになったのもこの時からである。また、これまで表現に関わる領域の「音楽リズム」「絵画制作」では技術的な指導に重点が置かれがちであったが、このとき、感性を育てることの重要性が指摘された<sup>6)</sup>。その後、幼稚園教育要領はおよそ10年ごとに改訂されてきたが、領域の分類などに大きな変更はなく、現在に至っている。

2017(平成29)年3月告示の幼稚園教育要領における領域「表現」の「ねらい」と「内容」を以下に示す<sup>7)</sup>。

#### 感性と表現に関する領域「表現」

〔感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。〕

\* 広島文化学園短期大学保育学科

## 1 ねらい

(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

## 2 内容

(1) 生活の中で様々な音、形、色、てざわり、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。(2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。(3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝えあう楽しさを味わう。(4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。(5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。(7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

\*下線は筆者による

体の動きに直接言及している内容については(1)、(4)、(8)に示されているが、表現について考える上でさらに重要なのは、(2)、(3)の内容であると考えられる。なぜなら、それらは前文のなかの「豊かな感性」に関連する項目であると考えられるからである。この「幼稚園教育要領」では「感性」について、定義が明確に示されていないが、「内容の取扱い」の(1)に「感性」の捉え方が示唆されている。「(1)豊かな感性は自然などの身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することを通して養われるようにすること。」と書かれており、さらにこのたびの2017(平成29)年告示の改定により次の文言が追加された。「その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など、自然の中にある音・形・色などに気付くようにすること。」と付け加えられ、このような細やかな気付きを大切にしながら感性の育ちを促すよう、十分とはいえないまでも具体的に指導の方法が示されたと言えよう。「幼稚園教育要領」ではいわゆる感性の定義は明確に示されていないが、本研究では「感性」を「感じる」「共感する」「表現する」と捉えている。

また、2019(平成31)年度より授業名称が「身体表現」から「身体表現領域指導法」へと変わり、授業において「主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける」ことが求められるようになった。では幼児の指導に当たる際、どのようなことが求められるであろうか。学習者が「表現活動を好きになること」も重要な条件に

なってくると考えられる。好きになってこそ主体的に取り組むと考えられるからである。内山・阿久津<sup>8)</sup>はダンスの授業における「好悪」と「有能感」の間には有意な正の相関が見られたことから、有能感を感じる事がダンスへの好意を生むと述べている。また、古市<sup>9)</sup>は「幼児の身体表現の指導において、保育者自身が緊張していると幼児に身体表現の楽しさが伝わらない」と指摘し、「保育者自身に身体表現に対する苦手意識がないことが重要な要件である」と述べている。このことから、身体表現の授業において、学習者の「好悪」「有能感」さらには「苦手意識がないこと」が重要になると考えられる。

本研究では、学生が「身体表現」を「好きになる」ことを目指し、「授業内容」と「好きになること」の関連性を検討することを第1の目的とする。次に、「好きであること」と「感性の育ち」と「表現力の育ち」とがどのように関わるかを検討することを第2の目的とする。さらに、「好きになること」と「身体表現に自信を持つこと」、「表現の技術や指導力を保育の場で役立てること」との関係を検討することを第3の目的とする。

## 方 法

### 1. 調査対象

広島市内A短期大学保育学科の2年生102名(女子96名、男子6名)。ほぼ全員が幼稚園教諭二種免許状と保育士証の取得を目指していた。

### 2. 調査時期

2018年2月上旬、「身体表現」の授業終了時に調査を行った。

### 3. 調査方法

一斉調査で、回答者名を記入させた。データはすべて統計的に処理し、個人のデータを公表したりしないことを伝え、実施の同意を得たうえで実施した。所要時間は10分程度であった。

### 4. 調査内容

(1) 授業を受ける前と受けた後の身体表現に対する好き嫌いについて尋ねた。回答は「とても好き」「どちらか」というと好き」「どちらか」というと嫌い」「嫌い」の4段階評定で行い、4点から1点で得点化した。

(2) 行った授業内容についての好き嫌いについて尋ねた。本山<sup>10)</sup>を参考に、授業内容は「表現遊び」、「自由表現」、「型のない踊りの創作」、「型のある踊り」、「音楽に振り付ける」の5つに分類した。「表現遊び」は、遠藤<sup>11)</sup>の定義した「模倣やごっこ遊びの要素を含む言葉と身体を使った表現を保育者や他の幼児とともに楽しむ活動」であり、「猛獣狩りに行こうよ」や「落ちた、落ちた」などを取り上げた。「自由表現」は、「オノマトペであやつろう」や「荷物を渡す・受け取る」などである。「型のない踊りの創作」は運動要素やイメージから見つけたテーマにより、グループで「ひと流れ」の短い作品を創作し、

互いに観合うものである。また「型のある踊り」は子どもが踊れるフォークダンスを取り上げた。「音楽に振り付ける」は子どもの歌（「動物園へ行こう」、「おもちゃのチャチャチャ」、「ぶんぶんぶん」など）を編曲した楽曲から1曲を選んでグループで振り付けをし、その発表を観合うものである。

これらの5つの授業内容、「表現遊び」、「自由表現」、「型のない踊りの創作」、「型のある踊り」、「音楽に振り付ける」について、どのように感じたかを尋ねた。回答は「とても好き」「どちらかというが好き」「どちらかという嫌い」「嫌い」の4段階評定とし、4点から1点で得点化した。

(3) 行った授業内容がそれぞれ「感性の育ち」、「表現力の育ち」に良い影響を与えたと思うかを尋ねた。回答は「とても与えた」「どちらかというで与えた」「あまり与えない」「まったく与えない」の4段階評定とし、4点から1点で得点化した。

(4) 授業を受けることにより自信がついたと思うかを尋ねた。回答は「とてもそう思う」「どちらかというと思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4段階評定とし、4点から1点で得点化した。

(5) 授業を受けて身についたことを現場で活かそうと思うかを尋ねた。回答は「とてもそう思う」「どちらかというと思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4段階評定とし、4点から1点で得点化した。

### 結果及び考察

#### 1. 授業「身体表現」の「好き・嫌い」について

全体を対象に、身体表現の授業を受ける前と後の授業の「好き・嫌い」について、平均得点を比較するために対応のあるt検定を行ったところ、有意 ( $t(101) = 8.93, p < .001$ ) であった。このことから本 授業を受講した学生は授業前よりも授業後に「身体表現」の授業の平均得点が高くなり、授業後に身体表現を好きになったと言える。

図1は、授業内容（表現遊び、自由表現、型のない踊りの創作、型のある踊り、音楽に振り付ける）別に、授業後の「好き・嫌い」の平均得点を示したものである。5つの授業内容の好きさについて1要因の分散分析を行ったところ、主効果が有意であった ( $F(3.53, 356.68) = 16.09, p < .001$ )。そこでボンフェローニの多重比較を行ったところ、「表現遊び」≒「型のある踊り」≒「音楽に振り付ける」>「自由表現」≒「型のない踊りの創作」となった ( $p < .001$ )。なお、授業前に「とても好き・どちらかというが好き」という57名（以下「好き群」と表記）と、「あまり好きではない・嫌い」という45名（以下「嫌い群」と表記）についても5つの授業内容の好きさについてそれぞれ1要因の分散分析を行ったが、上述した全体

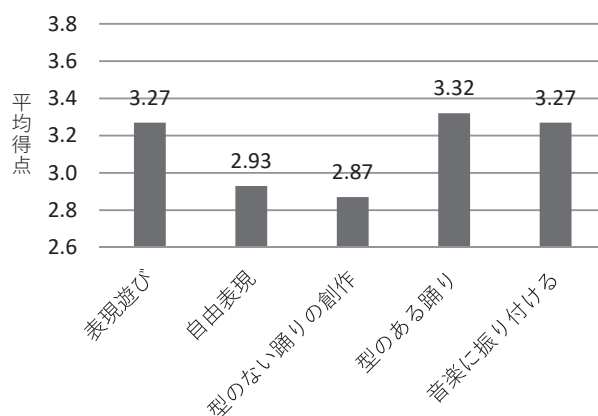


図1 授業内容別「好き」の平均得点

の結果とほぼ同様であった。このことから受講者は、「表現遊び」、「型のある踊り」、「音楽に振り付ける」を好み、これらの授業内容よりも「自由表現」、「型のない踊りの創作」をあまり好きでないといえる。

次に、5つの授業内容の「好き・嫌い」が、授業後の「好き・嫌い」に、それぞれどのような影響を及ぼしたのかを調べるために重回帰分析を行った。その結果、「型のある踊り」の標準偏回係数が $\beta = .346 (p < .001)$ 、「表現遊び」が $\beta = .278 (p < .001)$ 、「自由表現」が $\beta = .213 (p < .05)$ となり、これらの授業内容が授業後の「好き」に影響を与えていることが分かった。詳細に分析するために、「好き群」と「嫌い群」についても全体の分析と同様に、それぞれ授業後の「好き」に影響を与えている授業内容を調べた。「好き群」においては「表現遊び」が $\beta = .353 (p < .01)$ 、「型のある踊り」が $\beta = .328 (p < .01)$ となり、これらの授業内容が授業後の「好き」に影響を及ぼしていた。一方、「嫌い群」においては、どの授業内容も授業後の「好き」には影響を与えていなかった。

このことにより、全体的にみると「型のある踊り」、「表現遊び」、「自由表現」は身体表現を好きになるために有効な授業内容であるといえる。また授業を受ける前から身体表現を好きな人には、「表現遊び」、「型のある踊り」の授業内容がその他のものより大きな影響を及ぼすといえる。身体表現を好む人は、遊びとしての表現を楽しむ特性があるといえよう。またフォークダンスなどの「型のある踊り」については、表現する行動目標が明確に示されるために、決められた動きをうまく踊ることができたと感じ、楽しさを感じられたのではないかと考えられる。

#### 2. 身体表現における「好き・嫌い」と「感性の育ち」・「表現力の育ち」との関係について

さらに、各授業内容について詳細に検討するために、好き・嫌い群別に授業後の「感性の育ち」と「表現力の

育ち」の平均得点を示したものが図2から図6である。また授業内容ごとに、2（群：好き・嫌い）×2（育つもの：感性・表現力）の分散分析を行った。

(1)「表現遊び」(図2)においては、群の主効果 ( $F(1, 100) = 7.70, p < .01$ )、群×育つものの交互作用 ( $F(1, 100) = 5.06, p < .05$ ) が有意であった。このことから、「感性の育ち」と「表現力の育ち」の平均得点を群別に比較すると、いずれにおいても「好き群」は「嫌い群」よりも平均得点が高かった。また、「好き群」においては「感性の育ち」と「表現力の育ち」の平均得点に差がなかったが、「嫌い群」においては「感性の育ち」よりも「表現力の育ち」の平均得点が高かった。

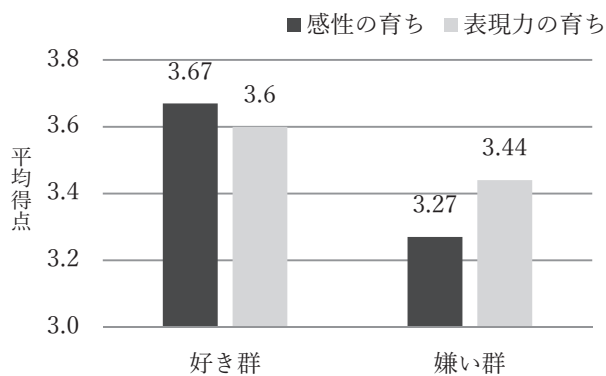


図2 「表現遊び」における感性の育ちと表現力の育ちの平均得点

(2)「自由表現」(図3)においては、群の主効果 ( $F(1, 100) = 12.24, p < .001$ ) と育つものの主効果 ( $F(1, 100) = 4.45, p < .05$ ) が有意であった。好き群は嫌い群よりも平均得点が高く、全体として「感性の育ち」よりも「表現力の育ち」の平均得点が高かった。

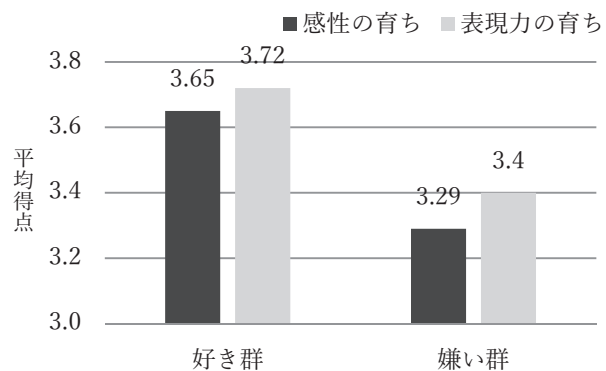


図3 「自由表現」における感性の育ちと表現力の育ちの平均得点

(3)「型のない踊りの創作」(図4)においては、群の主効果 ( $F(1, 100) = 7.81, p < .01$ ) と群×育つものの交互作用 ( $F(1, 100) = 4.63, p < .05$ ) が有意であった。こ

のことから、「感性の育ち」と「表現力の育ち」の平均得点を群別に比較すると、いずれにおいても好き群は嫌い群よりも平均得点が高かった。また、好き群においては「感性の育ち」と「表現力の育ち」の平均得点に差があったが、嫌い群においては両者の平均得点に差がないといえる。

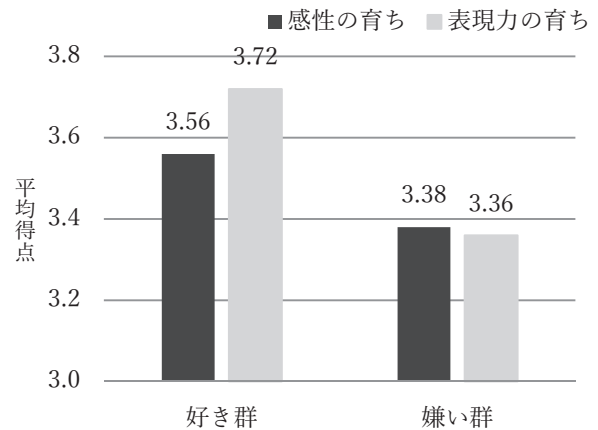


図4 「型のない踊りの創作」における感性の育ちと表現力の育ちの平均得点

(4)「型のある踊り」(図5)においては、群の主効果 ( $F(1, 100) = 9.54, p < .01$ ) のみ有意であった。このことから、好き群は嫌い群よりも平均得点が高かったが、両群とも「感性の育ち」と「表現力の育ち」の平均得点に差がないといえる。

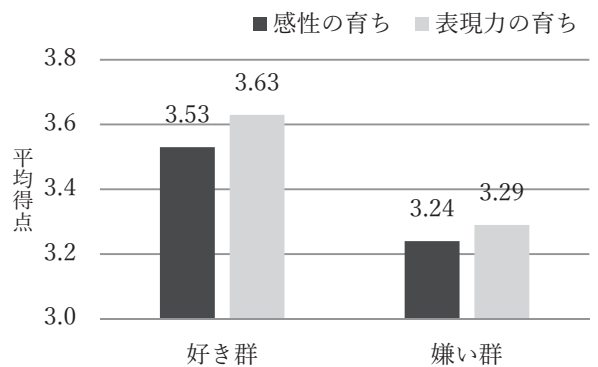


図5 「型のある踊り」における感性の育ちと表現力の育ちの平均得点

(5)「音楽に振り付ける」(図6)においては、群の主効果 ( $F(1, 100) = 10.30, p < .01$ ) のみ有意であった。このことから、好き群は嫌い群よりも平均得点が高かったが、両群とも「感性の育ち」と「表現力の育ち」の平均得点に差がないといえる。

上述した分析結果を授業内容別にまとめると、すべての授業内容において、好き群と嫌い群の平均得点に有意差が見られた。好き群は嫌い群よりもすべての授業内容



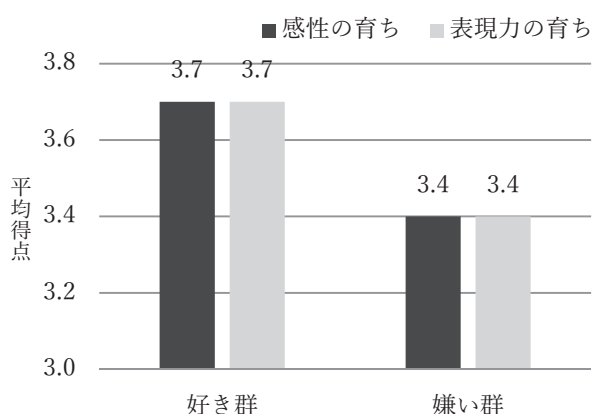


図6 「音楽に振り付ける」における感性の育ちと表現力の育ちの平均得点

で「感性の育ち」と「表現力の育ち」に影響があったと感じていた。

「表現遊び」と「型のない踊りの創作」においては群×育つものの交互作用が見られた。すなわち、「表現遊び」においては、嫌い群が「感性の育ち」よりも「表現力の育ち」に影響があったと感じていたが、「型のない踊りの創作」においては、逆に、好き群が「感性の育ち」よりも「表現力の育ち」に影響があったと感じていたといえる。

「型のある踊り」と「音楽に振り付ける」においては、好き群が嫌い群よりも平均得点が高かったが、両群とも「感性の育ち」と「表現力の育ち」には差がなかったと感じていた。

「自由表現」においては、好き群と嫌い群を全体としてみると、「感性の育ち」よりも「表現力の育ち」に影響があったと感じていたといえる。

以上のことから、好き群に対しては、嫌い群よりも、これらの授業内容がいずれも「感性の育ち」と「表現力の育ち」に良い影響を及ぼしていることが分かる。さらに授業内容ごとに詳細に分析してみると、好き群、嫌い群ともに「感性の育ち」より「表現力の育ち」に良い影響を及ぼしている授業内容は「自由表現」、「型のある踊り」である。ここで「感性の育ち」に目を向けると、得点が「表現力の育ち」を上回る授業内容は一つもなかった。この理由として、「表現力の育ち」の方が「感性の育ち」より視覚的に認識されやすいことが考えられるであろう。本研究では「感性」とは何か、について受講生に十分な理解を与えることなく授業を展開したことにより、「感性の育ち」に影響を与えるということの意味が分かりにくかったということも考えられる。この点は今後の重要な検討課題として残される。

### 3. 「身体表現」の授業内容の「好き」が「身体表現をすることへの自信」に及ぼす影響について

どの授業内容における「好き」が、授業後の「身体表

現をすることへの自信がついた」という認知に影響を及ぼすかを調べるために、重回帰分析を行った。その結果、「表現遊び」のみが $\beta = .324$  ( $p < .01$ ) となり、「表現遊び」が好きな人ほど自信がついたと感じていたといえる。

次に、どの授業内容における「感性の育ち」が、授業後の「身体表現をすることへの自信がついた」という認知に影響を及ぼすかを調べるために、重回帰分析を行った。その結果、「自由表現」のみが $\beta = .446$  ( $p < .001$ ) となり、「自由表現」が感性に影響を与えたと感じた人ほど自信がついたと感じていたといえる。

また、どの授業内容における「表現力の育ち」が、授業後の「身体表現をすることへの自信がついた」という認知に影響を及ぼすかを調べるために、重回帰分析を行った。その結果、「型のない踊りの創作」のみが $\beta = .371$  ( $p < .05$ ) となり、「型のない踊りの創作」において表現力に影響を与えたと感じた人ほど身体表現をすることへの自信がついたと感じていたといえる。

この結果から、「表現遊び」の授業内容を好きと感じた人は身体表現に自信がついたと感じている。「表現遊び」は保育現場においてすぐに役立てられる内容であるため、「表現遊び」を好きと感じ、楽しいと感じた人ほど自信を持つことができたと考えられる。

また「自由表現」において「感性」に良い影響を受けたと感じている人と、「型のない踊りの創作」において「表現力」に良い影響を受けたと感じている人は、身体表現に対する自信をつけることができたと認知している。感じたままに体を動かす「自由表現」では感性の豊かさが特に求められる。そのような表現が自由にできたことにより、自信につながったのではないかと考えられる。また「型のない踊りの創作」では「ひと流れ」の動きの作品創作により自分たちの伝えたいことを、言葉を使わずに表現しきることが必要となる。体を十分に動かすことはもちろんであるが、伝わる表現をいかに工夫し、実践するかを主体的に考え、そのことが表現力に良い影響を与えたと感じられた人ほど、身体表現をすることへの自信につながったのではないかと考えられる。

### 4. 「身体表現」の授業内容を保育現場で活かすことについて

身体表現に「自信がついた」という認知と「身体表現」の授業で身につけたことを「保育現場で活かしていく」ことの関連性を調べるために相関を求めたところ、有意な相関係数 ( $r = .547, p < .001$ ) が得られた。「自信がついた」と認知している人は「身体表現」の授業で身につけたことを保育現場で活かしていきたいと思っているといえる。

さらに、「身体表現」の授業内容において身につけた「感性の育ち」が、「保育現場で活かしていく」ことの認知にどのような影響を及ぼすかを調べるために、重回帰

分析を行った。その結果、「自由表現」で $\beta = .310$  ( $p < .05$ )、「音楽に振り付ける」で $\beta = .276$  ( $p < .05$ )となり、「自由表現」と「音楽に振り付ける」において「感性が育った」と感じている人ほど保育現場で活かしたいと思っているといえる。

同様に、「表現力の育ち」が「保育現場で活かしていく」ことの認知にどのような影響を及ぼしたかを調べるために、重回帰分析を行った。その結果、「音楽に振り付ける」でのみ $\beta = .647$  ( $p < .001$ )となり、「音楽に振り付ける」で「表現力が育った」と認知している人ほど「保育現場で活かしたい」と思っているといえる。

以上のことから、「身体表現」の授業をうけることにより「自由表現」と「音楽に振り付ける」で感性が育ったと感じている人と、「音楽に振り付ける」で表現力が育ったと感じている人は、保育現場において身体表現で学んだことを活かしていきたいと感じていることが分かった。

「音楽に振り付ける」身体表現については、現場で必要な能力として設定していたが、筆者は「感性と表現力の育ち」にそれほど大きな影響を与えるとは考えていなかった。しかしこの結果は、楽しく主体的に身体表現に取り組んだことにより、自分たちで振り付けを完成させる喜びを感じ、感性と表現力が身についたと感じやすかったのであろうと推測される。そしてこのような学習活動は、身についたことを現場で活かしていきたいと感じることにつながるのではないかと考えられる。

保育者養成校の学生に求められる資質の一つは、子どもたちに必要な「豊かな感性」と「表現力」を的確に理解し、それを育てることができる力である。そのためには、当該の学生が自ら「豊かな感性」と「表現力」を身に付けなければならない。

本研究で分かったことは、身体表現の授業を受けてまず身体表現が好きになることが重要であり、そのことにより身体表現に自信がつき、授業内容を保育現場で活かしていきたいと思うようになるということである。

一方、「感性の育ち」に関しては見直すべき点がある。これまで筆者は授業内容のうち「感性の育ち」をより促進するのは「自由表現」と「型のない踊りの創作」であると推測していた。しかしながら学生たちが「感性の育ち」に影響を与えたと感じていたのは、「自由表現」と「型のある踊り」であった。「型のある踊り」はフォークダンスを取り上げたもので、「感性の育ち」に大きく寄与するとは考えにくい。これは受講者の「感性」への理解が十分でなかったためではないかということも推測できる。先に述べたように感性が「感じる」、「共感する」、「表現する」の三つの要素から構成されていることを理解させ、豊かな感性とはどういうものかを正しく認識させていく必要があったのではないかと考えられる。そのうえで感性を豊かにするために効果的な内容を指導していかななくてはならない。

また今回の調査では学生たちにあまり人気がなかった「型のない踊りの創作」は、これまで指導者の間では一般的に感性を活性化させ、表現する力を伸ばすものであると考えられているようである。今後は受講する学生に「型のない踊りの創作」を好きにさせ、それに自信を持たせるため、苦手意識を無くす授業展開が必要であると考えられる。例えば創作した作品に対して効力感を持たせられるような評価方法（形成的評価、ルーブリック評価など）を考案することや、自身の作品を客観的に見ることのできるビデオカメラやタブレット端末などの機器の活用、さらにはグループ間で互いに肯定的な評価を交流できるような方法の考案などが考えられる。

嫌い群は、すべての授業内容において「感性の育ち」、「表現力の育ち」の平均得点が好き群よりも下回っていた。嫌い群も授業前に比べると身体表現を好きになってはいたが、好き群と同等な授業効果をあげたとはいえない。嫌い群の一人ひとりに相応しい教育効果をあげる授業内容の工夫が今後の課題である。引き続き指導内容、並びに授業の効果を詳しく分析していきたい。

## 要 約

本研究は、保育者養成校の授業「身体表現」を好きになるための要因を探究し、「身体表現」を好きになることが「感性の育ち」や「表現力の育ち」の認識にどのような影響を与えるかを検討したものである。調査対象は保育者養成短期大学2年生102名で、授業「身体表現」の終了時に調査を実施した。

授業後に、「身体表現」を「好きになったか」について統計的に検定を行ったところ、平均得点が授業前よりも有意に高くなり、この授業を行ったことにより、「身体表現」が好きになったといえる。

さらに、5つの授業内容（「表現遊び」「自由表現」「型のない踊りの創作」「型のある踊り」「音楽に振り付ける」）のどれが身体表現を好きにする要因として影響するのかを分析したところ、「表現遊び」「自由表現」「型のある踊り」が「型のない踊りの創作」「音楽に振り付ける」よりも有意に好まれていた。すなわち、この3つの授業内容が授業「身体表現」を好きにさせたことが分かった。

次に、授業の前の身体表現が「好きか」「嫌いか」の群に分けて、身体表現の授業内容が「感性の育ち」と「表現力の育ち」に及ぼす影響を調べたところ、「好き群」は「感性・表現力」どちらの育ちにも授業内容が影響を与えたと認識していたが、「嫌い群」においては認識していなかった。

さらに、身体表現に「自信がついた」と「保育現場で活かしていく」ことの関連性を分析したところ、「自信がついた」と認識している人は、「身体表現」の授業で身に付けたことを保育現場で活かしていきたいと思っていることが分かった。

今後は、身体表現の授業内容の中で、「豊かな感性」と「表現力」が育つと考えられる「型のない踊りの創作」を、学習者が「好き」になり「自信」を持つような指導方法の構築が課題となる。

#### 引用文献

- 1) 文部科学省, 「幼稚園教育要領解説」, 233 (2018), フレーベル館
- 2) 文部省, 幼稚園教育百年史, 533-584 (1979), ひかりの国
- 3) 西洋子, 本山益子, 吉川京子: 子ども・からだ・表現—豊かな保育内容のための理論と演習—[改訂2版], 122 (2009), 市村出版
- 4) 2) に同じ, 627-640
- 5) 2) に同じ, 652-661
- 6) 文部科学省, 「幼稚園教育要領解説」, 129-155 (1989), フレーベル館
- 7) 文部科学省, 「幼稚園教育要領解説」, 233-243 (2018), フレーベル館
- 8) 内山須美子, 阿久津隼佑: ダンス学習の楽しさに関するテキストマイニングによる分析, 白鳳大学教育学部論集, 8, 95-96 (2014)
- 9) 古市久子: 保育表現技術 豊かに育つ・育てる身体表現, 36-37 (2013), ミネルヴァ書房
- 10) 本山益子: 子どもの身体表現の特性と発達, 19 (2003), 市村出版
- 11) 遠藤晶: 身体表現遊びにおける保育者と幼児の相互作用を高める指導—保育者の「言葉がけ」に着目して—, 武庫川女子大学大学院教育研究論集, 9, 1 (2014)

#### Summary

Factors that make students enjoy “physical expression” classes, which is one of the course for training nursery teachers, were investigated, and the effects liking physical expression on recognizing the “development of sensitivity and expressive power” were examined.

Participants were second-year students (N = 102) in a junior college for nursery teacher training.

The survey was conducted after completing the physical expression course, and inquired if the participants liked physical expression.

Results indicated that the mean score increased significantly compared to before taking the course, which indicated that students came to enjoy physical expression by taking the course. Moreover, the effects of five components of the class: “playing with expressions,” “free expression,” “creating dance without form,” “dance with form,” and “music choreography,” on liking physical expression were examined. The results indicated “playing with expressions,” “free expression,” and “dance with form” were significantly liked by students. These contents were regarded as factors that developed a liking for physical expression classes.

Next, the effects of the class on the development of sensitivity and expressive power was examined by classifying the students into two groups; those that liked physical expression before taking the class and those that did not like it before taking the class. The results indicated the former recognized that taking the class affected the development of sensitivity and expressive power, whereas the latter did not recognize this effect.

Furthermore, correlations between confidence in physical expression and utilizing it in childcare settings were examined. The results indicated that those recognizing they became confident about Physical expression planned to utilize it in childcare. In the future, teaching methods that facilitate students' liking and confidence for “creating dance without form,” which is considered useful for developing sensitivity and expressive power, should be designed.